HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	プレハーノフとプロレタリアートのヘゲモニーの思想
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	スラヴ研究, 4, 65-85
Issue Date	1960
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4948
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113146.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

プレハーノフとプロレタリアートのヘゲモニーの思想

荒　又　重　雄

I　問題提起

プレハーノフがロシアにマルクス主義を系統的に紹介した最初の1人であり，ナロードニキ主義と対決しつつ（Ⅰ）ロシアはすでに資本主義的発展の道に入った．（Ⅱ）したがって，ロシヤにおいても労働者運動によって社会主義が獲得されねばならない．（Ⅲ）しかし，ロシヤには「前世紀の遺物」が残存しているので，政治的自由がまず獲得さるべきである，という綱領上の3要点を明らかにすることによって，ロシヤ社会民主主義を，はじめて1つの政治思想として，他の革命思想から分離させた先覚者であったことについては異論の余地はない．また，時期についての細かな異論を別にすれば，プレハーノフが最初ナロードニキとして登場し，次に革命的マルクス主義の役割をはたし，のちメンシエヴイキーの側に立った，という評価も一致している．しかし，なぜプレハーノフはメンシエヴイキーになったか，しかもメンシエヴイキーの中での，第2インターの中での彼の独自性（ストルィピン反動期の解党派に対する，第2インターの修正主義に対する闘争）はなにに由来するのかなど，たくさんの問題がのこされていることもまた疑いを入れない．そしてこれらの問題の解明は，その啓蒙的段階の多くをプレハーノフに負っていた日本マルクス主義にとって，重要な意味をもつはずである．(1)

簡単にプレハーノフ研究史を振り返ってみると，1920年代と1930年代にそれぞれ特徴的視点があったことがわかる．プレハーノフの没後，レーニンの指示(2)によって直ちに20年代の研究が開始されるが，マルクス主義の移入史が中心に据えられ，プレハーノフの理論が彼のメンシエヴイキー的方針と切りはなされて評価された．その結果，プレハーノフはロシヤマルクス主義の父とされたが，ロシヤ革命思想史の中の位置づけ，およびメンシエヴイキーとの関連が明らかにされなかった．30年代には新反対派との闘争の中で，スターリンによりプレハーノフ研究の新たな視点が提出されるが，それはミーチンらによって，哲学におけるレーニン的段階の論争の中でおし進められた．(3)その視点は，20年代の研究を批判してプレハーノフの理論をメンシエヴイキーの方針と関連させ，プレハーノフを第2インターの一翼と規定することであった．この見方は当然にもプレハーノフを「レーニン主義の基礎」の中の第2インターの性格づけと関連させて

（1）松村一人，「弁証法とはどんなものか」岩波，1950．はプレハーノフ克服の努力を示す文献である．しかし，プレハーノフ研究としてみるならば，「根本問題」のみが焦点に置かれヘーゲル研究，チホミーロフ批判から始まって「史的一元論」を経て展開する流れが扱われてないから，不充分である．

（2）Ленин, соч. изд. 4, том 32. стр. 73.

（3）ミーチン，「哲学論争の総決算と反宗教宣伝」永田広志訳，1932.

理解しようという方向を導いた.[4] その結果，西欧とはかなりちがった政治的状況にあったロシヤを西欧と一緒にすることによって，プレハーノフをロシヤ革命思想史から切りはなし，また彼のメンシエヴイキーおよび第2インターの中での独自性を明らかにしなかった．38年に出た「党史小教程」はプレハーノフの位置をナロードニキを批判した点において独自であるが，，批判の仕方およびそれと関連してのマルクス主義の提起の仕方にまでは紙幅をさいていない．30年代にはプレハーノフの晩年の理論的シエーマの批判から出発してその観点を遡及させていく見方が強い．

最近再び活発になりつつあるソヴェトのプレハーノフ研究[5]は，30年代の破滅的批判からプレハーノフを復権するという性格を色濃くもっており，部分的には20年代への後退すらみうけられるが,[6] 大勢は30年代の水準を未だ越えていず，「レーニン主義の基礎」と「党史小教程」の研究の枠内にある．フオーミナは，「プレハーノフの活動は資本主義の発達の比較的平和な時期にはじまった．その時にはプロレタリアートの革命的戦闘への準備，プロレタリアートの独裁の獲得の道の問題はまだ出るべき時でないように思われた」[7]としている．しかし平和的といってもブルジョア革命がさしせまり「人民の意志」派が「臨時革命政府」の思想をいだいていたロシヤであり，プレハーノフは暴力革命を恐れてはいない．「理論と実践の分離」[8]といっても，プレハーノフの初期の論はまさに理論と実践の統一だったし，ロシヤには理論家と大衆活動家と議員の分裂という形はさほど進んでいたと考えられない．ミーチンは最近，亡命＝ロシヤとの接触の切断を強調[9]して初期の積極面を救い，後期を説明せんとしているかにみえるが，どのような思想を持っていたかが逆に亡命という条件の作用に影響を与えるという点をあわせ考えなくてはならぬ．そしてソヴェト大百科第2版（1955）によるプレハーノフの総括的規定は「ロシヤおよび国際社会主義運動の重要な活動家」「卓越したロシア哲学者かつマルクス主義宣伝家」とされるにとどまるのである．

小稿の目的は，プレハーノフの歴史的位置の解明に若干の寄与をなすために，プレハーノフの生涯の最良の時期に焦点をあわせ，「労働解放国」の創立によって1883年の転換をロシア革命思想史にもたらしたプレハーノフが，しかし1894年の転換を支え得なかったことの思想史的意義を，プロレタリアートのヘゲモニーの思想の成熟度をラズノチーネツの革命思想との関連において分析することにより，明らかにせんとするのである．

1894年のロシヤ革命運動史における意義について1902年にレーニンは，社会主義と労働運動の結合した年と特徴ずけた．そしてそれ以前の社会民主主義を胎児的過程にあ

（4） 大百科版，弁証法的唯物論 ナウカ 1935 p. 127.
（5） プレハーノフ生誕100周年（1956）前後からはじまり，近く新らしい全集も出版される．
（6） たとえば M. И. Сидров は “Вопросы Философии” 1956 No. 6 誌上の論文でプレハーノフの有名な5項目説を扱かっているが，そのさい，プレハーノフのいう строй の中に弁証法的矛盾はふくまれていないことを忘れている．
（7） В. Фомина, Философские взгляды Г. В. Плеханова, 1955, стр. 309.
（8） там же, стр. 310.
（9） “Правда”, 1956. 12. 12.

ったとした.[10]1912年にレーニンはデカブリスト以来のロシヤ革命運動の3つの段階を指摘し,[11]1914年，さらにそれを時代区分として明確に発展させ，1895年をプロレタリアの時代のはじまりとした.[12]「党史小教程」も94年の区分点を考慮においているが，少数の労働者への宣伝から広汎な労働者への煽動へ，という運動形態の変化のみが問題とされ，既存の理論が実践に応用されたと考えられている傾向が強い．新しい党史はこの欠点を克服し，「社会民主主義団体の指導下に，労働者大衆が闘争に立ちあがった」[13]ことをあげている．小稿は，どのような理論がこのようなときに労働者の先頭に立ち得たか，プレハーノフの理論はその任に耐え得たかどうかを分析する．

またここでプロレタリアートのヘゲモニーの思想とは，「ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級である」[14]という思想であり，「プロレタリアートの世界史的役割」をみとめることである．マルクスはこの思想に立って，1848年のドイツ革命にプロレタリアートをもっとも徹底した民主主義派として参加させる努力をし，レーニンはロシヤ革命においてそれをブルジョア革命の主導権をプロレタリアートが奪うという思想にまで具体化した.[15]プロレタリアートのヘゲモニーの思想はプロレタリアートの独裁の思想と不可分であり，そのよって立つ根拠の1つである.[16]プレハーノフにおけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想についての20年代の見解は，ジノヴィエフの論述にみられる．彼は，ボルシェヴィズムとその他の政治的諸流派を区別するものがプロレタリアートのヘゲモニーの思想であり，この思想こそが問題中の問題であると述べ，「ロシヤ革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想の創始者はプレハーノフとレーニンである．プレハーノフとレーニンの間にあるささいな相違はただ次の点にあるのみだ．すなはちプレハーノフは，ロシヤ革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想を**理論的**に宣言した最初の人として，レーニンよりも早く政治の戦線に入ったが，**政治的**にはロシヤ政治史のもっとも重要な時期にこの思想を裏切った．これに対してレーニンは，この30年のあいだ彼の主要思想を守った．そして……その思想の実現である党を作った」,[17]としている．ここではレーニンとプレハーノフがためらいなく同列に置かれ，プレハーノフが政治的に誤ったこと党を作れなかったことと，彼の理論との関連が不問にされている．これに対して30年代の見解を示す「党史小教程」は「プレハーノフもプロレタリアートのヘゲモニーについての『賛成者であった』という話は誤解から来たものである．プレハーノフはプロレタリアートのヘゲモニーの思想に慇波を送り厭だときっぱり言葉に出してはいわなかった．これは本当だ．が，事実の上で彼はこ

(10) Ленин, соч., изд. 4, том 5, стр. 483.
(11) его же, соч., изд. 4, том 18, стр. 9.
(12) его же, соч., изд. 4, том 20, стр. 223.
(13) История Коммунистической Партии Советского Союза, 1959, стр. 37.
(14) Ленин, соч. изд. 4, том 6, стр. 35.
(15) しかし，プロレタリアートのヘモゲモニーの思想を，単に「20世紀のブルジョア革命」にのみ関連させて理解するのは狭い．
(16) プロレタリアートのヘゲモニーとプロレタリアートの独裁の思想としての不可分性から，革命運動における具体的目標としても両者を同一視するとき，トロッキーのプロレタリア独裁論が生まれる．
(17) Sinowijew, Geschichite der Kommunistischen Partei Russlands, 1923 s. 208.

の思想の本質に反対していた」[18]としている．ここでは，ジノヴイエフがプレハーノフにプロレタリアートのヘゲモニーの思想が存在したというのに対して，非存在が主張されている．しかし「党史小教程」はこの点について党の形成期の敍述の中では一切触れず，1905年の革命への方針に関してプレハーノフが自由主義ブルジョアジーの孤立化政策に反対したことと関連させて触れたのである．この敍述の形式が一つの枠となって，以後の研究を規制している．[19]しかしプロレタリアートのヘゲモニーの思想は，単にロシヤにおけるブルジョア革命の問題ではないし，また，プレハーノフは労働者を媒介にしての農民層への働きかけの期待をくり返し語っており，[20]ブルジョア革命はブルジョアジーがやるものであるから，だからプロレタリアートのヘゲモニーは考えられないというのは，後年の理論化ではあってもプレハーノフの思考過程を集約するものではない．小稿はここで，ナロードニキ主義との関連のもとにプレハーノフにおけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想の成熟度を分析するが，小稿の分析からすると新しい党史が「人民の友とは何か」の結語を引用し，「ヴェ・イ・レーニンはロシヤのマルクス主義者の中で初めて，プロレタリアートのヘゲモニーに関する命題と，ツアーリズム，地主およびブルジョアジーを打倒する主要な手段としての労働者と農民の革命的同盟の思想を打ち出した」，[21]としているのは意義深い指摘である．

Ⅱ 政治的自由と労働者階級

すでにふれたように，ロシヤも資本主義的発展の道に入っており，したがって労働者運動によって社会主義が獲得されるべきである．しかしロシヤでは先ず政治的自由が獲得されなくてはならない，というのが，プレハーノフがよってもってロシヤ社会民主主義派を独立させた綱領上の要点であったが，しからばプレハーノフは当初政治的自由と労働者階級との関連を如何に考えていたか．これはまさにブルジョア革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの問題である．83年の「社会主義と政治闘争」，84年の「労働解放団綱領」をみるならば，そこにきわめて特徴的なシェーマがあることに気ずく．すなわちロシヤ社会主義者の任務は「一方からは自由な政治制度の獲得，他方からは将来のロシヤ労働者社会主義政党のための要素の養成」，[22]「絶対主義に対する闘争と並んで将来におけるかかる政党設立のための要素の精練」，[23]と立てられている．ここにおいて絶対主義との闘争と労働者党設立の準備が切りはなされ，並列におかれているところが問題である．これは何を意味するか．

プレハーノフは述べる．「……民主主義的議会の要求を掲げなければならない．この議会は『個人の権利』とともに労働者のために『市民的権利』を保障し，彼らに普通選挙権の方法によって国の政治の中に能動的に参加する可能性を与えるはずである」．[24]

(18) История В. К. П. (б), 1950, стр. 67.
(19) たとえば Фомина, там же, стр. 244.
(20) 1885年，1887年の綱領草案をみよ．
(21) История Коммуистической Партии Советского Союза, 1959, стр. 34-35.
(22) Избранные философские произведения Г. В. Плеханова, том. I. 1956, стр. 106.
(23) там же, стр. 51.
(24) там же, стр. 107.

「しかしこれだけでは足りない．もっと正確にいえば，同時に他の種の他の範囲における事業がなければこれに到達しえない．……社会主義政党自身は自由主義的ブルジョアジーのために言論および行動の自由を闘い取ってやったあとに，現代ドイツ社会民主党の状態と同じ『除外』的状態に陥るかも知れない」.(25)「それ故……憲法時代が来ないうちに，ロシヤの社会的力量の事実上の関係を労働者階級の利益になるように変えるための配慮をしなくてはならない」.(26)「ロシヤ憲政生活の最初の時期において，わが労働者階級が確定せる社会的政治的綱領を有する特別の政党として進出しうるようになることを目指して突進しなければならない」.(27)プレハーノフはここで，労働者が政治の中に入るためには政治的自由が必要だが，労働者党だけ除外されるおそれがあるので，あらかじめそうならぬような準備も**同時に**必要だといっているのである．ところでこの課題はだれに対して立てられているのか．「ロシヤの社会主義者」—「革命的インテリゲンツィア」に対してである．プレハーノフはロシアにおける資本主義生産の未発達が中産階級の未発達に結果していることを述べ，「社会主義的インテリゲンツィアは，それゆえ，現代の解放運動の先頭に立たねばならないであろう．その運動の直接の課題は，わが国に政治的自由の制度をうち立てることであろう」,(28)としている．それでは「革命的インテリゲンツィア」と労働者との関連はどうか．プレハーノフは述べる．「工業労働者はわが革命的インテリゲンツィアの絶対主義との闘争に参加するであろう．それから政治的自由に到達して労働者の社会主義政党の形で組織を獲得するであろう」.(29)「社会主義的インテリゲンツィアは即刻，勤労住民の先進的代表者としてのわが工業中心地の労働者たちを，全ロシヤの生産階級の現代的な必要と社会主義の基礎的な課題に相応した明確な社会政治綱領をもった，相互に連絡のある秘密サークルへと組織することに取りかからなくてはならない」.(30)このサークルは政党ではない．プレハーノフは綱領の主要点を指摘するが，しかし次のような前おきのもとにである．すなわち．「そのような綱領の詳細は，ただ将来において，しかも政治の中への参加を呼びかけられて特別な政党に結集した労働者階級自身によってなされるであろう」.(31)政治的自由のもとで独自の労働者党に結集出来るようになった労働者に対して「革命的インテリゲンツィア」はどういう関係に立つか．プレハーノフは述べる．「かかるプロレタリアートは，最も誠意ある庇護者にさえも権力の獲得をゆるさないであろう．それは次の単純な理由による．すなわちプロレタリアートは自分の政治的教養のための学校を経てきたが，それは永遠に1人の後見人から他の後見人に移って行くようなことはせず，何時かはこの学校を卒えて歴史の舞台に自立せる役者として登場しょうという確固たる決心をもってであったからである．第2の理由は，そうなればプロレタリアート自身も社会主義革命の任務を決定することが出来るはずであり，かかる後見は無用であるはずだからである」.(32)かくて

(25) там же, стр. 107-108.
(26) там же, стр. 108.
(27) там же, стр. 108.
(28) там же, стр. 373.
(29) там же, стр. 111.
(30) там же, стр. 374.
(31) там же, стр. 375.
(32) там же, стр. 101.

プレハーノフのシェーマがほぼ明らかになる．「革命的インテリゲンツィア」は独自の社会勢力としてみとめられ，絶対主義と闘う主力部隊とされている．彼らは「ロシヤの社会主義者」，「ロシヤの革命家」，「社会主義的インテリゲンツィア」とも呼ばれ，「革命党」，「社会主義党」，「革命的社会主義党」をつくっている．労働者は彼らの闘争に参加する，労働者は秘密労働者サークルをつくり革命党の指導のもとに働く，しかしこれは労働者党ではない，政治的自由の獲得とともにはじめて労働者党に転生し，革命家の後見を拒否して独自の闘争をはじめる，というのがそれである．2つの任務を並列させることの奥には，このようなそれ自体としては極めて整合的な論理があった．そしてここには絶対主義と闘う労働者の力が理論化されていない．

プレハーノフは，一方において政治的テロルを主たる戦術にすることに反対し，革命家が大衆とはなれることに反対していた．したがって以上の理論は，それが実践に適用されるとき直ちに欠陥を露呈した．ラヴローフ，チホミーロフらとの分裂の進展，ブランキスト党との接触などのなかで彼の理論は動揺する．84年の「われらの対立」と85年の「ロシヤ労働者の現代的課題」を分析することにより，それを明らかにしよう．プレハーノフの83年の立論に対して「人民の意志」派は，自分たちもまた労働者が革命にとって重要な役割をはたすことを否定しない，しかし絶対主義の圧迫のもとでの労働者の中における煽動は極度に困難である，と批判した．プレハーノフはそれに答えて「現時点での革命運動はただ労働者大衆の中でのみ可能である．……革命は労働者にとって『特に重要な意義』をもっている（労働者が革命にとって意義があるのではなく――筆者）．」[33]とした．論争の中でプレハーノフは，プロレタリアートのヘゲモニーの思想に近づく．「次のことを想起せよ．新紡績工場の労働者は自分たちのために賃上げを要求したばかりでなく，全ロシヤ市民のために周知のごとき政治的権利を要求した」．[34]「これら（北露労働者同盟や1878年のストライキ）に助力することは可能であり困難ではない」．[35]「革命的インテリゲンツィアの外に，だれが労働者階級の政治的成長に力をかすことが出来るか」．[36]「労働者の政治運動は，政治的自由の支持者たちの心に新しい確信を鼓吹するであろう」．[37]「労働者党のみが今日わがインテリゲンツイアをテロルと政治的無気力に運命づけている矛盾をとりのぞきうるであろう」．[38]「今のところわれわれは労働者党をもっていないので，『都市』革命家はいや応なしに『社会へ』と向って行き，事実上彼らはその革命的代表となりつつある」．[39]「労働者大衆に支えられたわが『社会』の先進的部分の政治的要求は，ついに，かくも古くより待ちのぞまれていた満足をうるのである」．[40]かようにしてプレハーノフは，絶対主義と労働者との闘争，革命的インテリゲンツィアと労働者との結合を述べ，ロシヤの革命思想に大きな影響を与え

(33) там же, стр. 318.
(34) там же, стр. 359.
(35) там же, стр. 358.
(36) там же, стр. 360.
(37) там же, стр. 360.
(38) там же, стр. 362.
(39) там же, стр. 366.
(40) там же, стр. 360.

ることになる．しかしこれらの思想はプレハーノフ自身の中にどのように固定されたか．83年の理論の弱点をプレハーノフは以下のごとく問題にしている．「広汎な労働運動は，たとえ一時的であろうともまた幾分かのみであろうとも，自由な制度の勝利を前提する．この制度を獲得することは，今度は逆に人民のもっとも先進的な層の政治的支援なしには不可能である．どこに出口があるか．西欧の歴史はこの魔法の環を労働者階級の徐々の政治教育によって爆破した」.(41)この解決はさしあたり戦術面でなされており，労働者こそが絶対主義と闘かうという戦略面でなされていない．また，「広汎な労働者の中での煽動は，あらかじめ彼らの中に確立され，労働者の知力を準備し，彼らの運動を指導する出来るだけたくさんの秘密組織の助けなくしては考えることが出来ない」.(42)「彼ら（社会主義者—筆者）は労働者に，労働者自身の旗を指示し，労働者に，労働者自身から出た，すなわち労働者のなかから出た指導者を与えなくてはならない．またブルジョア的『社会』ではなく労働者の秘密組織が労働者の智力に対し支配的な影響を獲得するよう配慮しなくてはならない．これによってロシヤの労働者社会主義党の形成はいちじるしく促進されるであろう」.(43)というプレハーノフの言葉の中には，労働者サークルを革命党と別のものとみる思想がのこっている．「われわれはロシヤの政治的自由が労働者階級の利益に一致することをよく理解している．それゆえ，労働者階級の中に存在している革命的サークルは，宣伝煽動ときには公然たる街頭的闘争の方法によって，われわれ革命的インテリゲンツィアの政治闘争に協力しなくてはならないと考えている」.(44)というプレハーノフの言葉には，革命的インテリゲンツィアの政治闘争という考え方がのこっている．プレハーノフは85年ブラゴエフ党にあてて次のように書いた．「私はあなたがた労働者グループを頼りにする．なぜならわれわれのもとでは社会民主党は主として労働者党でなくてはならぬからである．それはもちろん労働者グループが他の階級から出て来た人々をおしのけるべきだということを意味しない．……私が労働者グループを労働者党と名づけるとすれば，それによって私はただ次のことをいわんとするにすぎない．すなわち，われわれ革命的インテリゲンツィアは労働者と手に手を取って進み……」.(45)かくのごとく，「魔法の環」の不充分な解決と照応して，以前のシエーマは完全には解体せず，新しい思想は「労働者に支えられた革命的インテリゲンツィアの闘争」，「労働者と革命的インテリゲンツィアが手をとり合って」，「革命的インテリゲンツィアに労働者が協力して」という新たなシエーマで固定されることになった．

プレハーノフの思想はしかしその後しばらくのあいだじりじりと前進する．87年の「ロシヤ社会民主主義綱領第2草案」には次のようにある．「ただこの階級（プロレタリアート……筆者）の仲介によってのみ，わが人民は開化された人たちの先進的気運へ参加しうるであろう．この理由によってロシヤ社会民主主義者は，革命的労働者党の形成を自己の第1のもっとも主要な責務とみなしている．このような政党の成長発展は，

(41) там же, стр. 358.
(42) там же, стр. 360.
(43) там же, стр. 361.
(44) там же, стр. 364.
(45) Sonja Rabinowitz, Zur Entwicklung der Arbeiterbewegung in Russand bis zur grossn Revolution von 1905, 1914, S. 70.

しかし現代ロシヤ絶対主義のもとにおいて非常に大きな妨害に出あうであろう．**それゆえ**絶対主義との闘争は，今将来のロシヤ労働者党の萌芽である労働者サークルにとって**さえ**義務的である．絶対主義の転覆はその第1の政治的課題たるべきである」.(46)だが筆者の強調部分からもわかるように，決定的にシエーマをやぶるものではない．89年の第2インター・パリ大会での演説(47)でも，プレハーノフは「われわれ革命的インテリゲンツィアの課題は，ロシヤ社会民主主義者の意見によれば次のことに帰する．すなわち現代の科学的社会主義を習得し，それを労働者大衆に普及し，労働者の進撃の助けによって専制のとりでに立ち向かわねばならぬ，ということである．ロシヤにおける革命運動はただ労働者の革命運動としてのみ勝利しうる」,(48)とのべている．労働者**こそ**が闘い，革命的インテリはその一部となって闘う，という思想までには，いまだ何歩かの差があるというべきである．

プレハーノフの83年の思想は，1902年の綱領論争にまであとをのこしていると考えられる．プレハーノフの起草した第1草案には政治的自由の獲得という当面の目標について次のようにある．「しかしわが国では，前資本主義的——農奴制的——社会制度の多数の残存物が恐ろしい重圧となって全勤労住民のうえにのしかかっており，ロシヤの労働運動の前進を阻止するいっさいの障害物の中でもっとも強力な障害物となっているため，党の目標はいちじるしく修正される．先進資本主義諸国に資本主義的生産関係にたいする自然的補足物としてすでに存在しており，資本にたいする賃労働の階級闘争の完全で全面的な発展のため欠くことのできないものとなっている，そういう法治制度を，ロシヤ社会民主主義者はようやくこれからかちとらなければならない」.(49)プレハーノフのこの思想の性格は草案の構成を分析するとさらに明らかになる．第8項までに資本主義生産とプロレタリア独裁について敍述され，第9項で世界市場の発展により労働運動が国際的になったことが，第10項でしたがってロシヤ社会民主党が国際社会民主主義の一部たることがのべられ」第11項で，党は他のすべての国の社会民主主義者の目ざしているものと同一の終局目標を追求する．党は労働者の利益と資本家の利益が和解しえないように対立していることを労働者のまえに示し，プロレタリアートの成就すべきたるべき社会革命の歴史的意義と性格と諸条件とを彼らに明らかにし，自分たちの搾取者との不断の闘争へ彼らの勢力を組織する」,(50)とのべられたのち，「しかし」と先の項がつづくのである．この構成では党の労働者的性格と一般任務を規定した第11項が，党がロシヤの労働者階級とつながっていることから直接出されているのではなく，第10項の媒介によって与えられている．したがってロシヤが西欧に対して特殊であるかぎりで．第11項はロ

(46) Плеханов, там же, стр, 379.

(47) この演説には2つの異文がある．第1は1890年にプレハーノフがジュネーヴで «СОЦИАЛ-ДЕМОКРАТ» の第1号に発表したものであり，第2のはゲードの文庫の中から発見されたものである．ここではプレハーノフの校閲した第1の方をよりプレハーノフの真意に近いとしてとった．第2の方には「革命的インテリゲンツィア」という語はなく，「助けによって」という語もない．「労働者の革命運動」という語も単に「労働運動」となっている．

(48) Плеханов, там же, стр. 419.

(49) Ленин, Соч. изд. 4, том. 6, стр. 9.

(50) там же, стр. 8.

シヤの党の性格規定から落ちる．では政治的自由のため闘うのはどんな党か？レーニンは農奴制の社会的結果をさらにくわしく示してそれとの闘争の客観的力を示すと同時に「国際社会民主主義は勤労被搾取大衆の解放運動の先頭に立っている」のではない．「それはただ，労働者階級だけの，ただ労働運動だけの先頭に立っているのだ」,(51)とし，第11項に関しても党が具体的にプロレタリアートの先頭に立って闘かうという思想を加えるべく批判した．採択された綱領正文は，構成においても党の一般的機能をプロレタリア革命に関する部分の直後におき，次に，ロシヤにかぎらず各国の社会民主主義者に，それぞれ異なった当面の任務を与える，という形になっている．プレハーノフの草案とレーニンによる批判とを分析することによって，われわれは，この綱領論争の中で，プレハーノフの83年の思想の残存物，社会民主主義者（←革命的インテリゲンツィア）が「勤労被搾取大衆」の助けによって政治的自由を闘い，党（←革命党）が労働者の闘争を助ける，という思想がレーニンによってはじめて決定的に克服されて行く姿をみることが出来るのである．

以上われわれは最良の時期のプレハーノフにおけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想をあとづけたが，彼の思想の性格をさらに明らかにするために，83年前後のナロードニキと94年前後のレーニンを分析してみる．1880年の「黒土再分割」誌はのべる．「人民の間でのわれわれの役割は基本的には端緒をつくることである．残りはすべて人民自身，その最もよい代表者たちによって行なわるべきものである」.(52)これは，「革命的インテリゲンツィア」＝庶民革命家が人民に対し最初の必要な刺激を与えるならば，人民自身が自から本能的にオープシチナの理想を実現するであろう，という思想と結合していた．しかし，人民と革命家の関係についてのこの考え方は，もっと別な革命路線とも共存しうるものである．1880年の「人民の意志」誌はのべる．「党が充分な力を組織し，全人民的運動を待ちおおせ，自主的に活動しはじめ，中央権力を獲得したと仮定しよう．党の爾後の役割は何か．新しい国家体制をつくり必要な改革を命ずることか．われわれは考える——否と」.(53)ここではテロリストの蜂起が全人民的運動と時を一にして，しかも独自におこって権力をにぎり，その後「人民へ権力を譲渡する」(54)という思想である．「黒土再分割」の場合の「端緒をつくる」というところ，「人民の意志」の場合の「権力獲得」というところに「政治的自由の獲得」を入れてみると，83年のプレハーノフの思想が出てくることがわかる．人民と革命家の関係についての理論のこの基本構造がかわらないかぎり，プレハーノフの思想ははっきりとプロレタリアートのヘゲモニーの思想に転生できない．このように革命家を人民とあくまで異質なものとおく考え方は，永くロシヤの革命思想史を彩どってきたものであり，事実として人民からかけはなれた層のあいだに革命思想がはぐくまれてきたこと，事実として「庶民」の「革命家」が運動を支えてきたこと，を物質的基盤とするものであったろう．しかし思想が人民と結びつくためには，あらかじめその限界がのりこえられなくてはならない．プレハ

(51) там же, стр. 33
(52) 鳥山成人「"人民の意志派" の革命理論」スラヴ研究．第1号，1957，p. 57.
(53) 同前 p. 38.
(54) 同前 p. 38.

ーノフの思想は充分にその条件にかなったものではなかった．ロシヤ労働者運動の発展とプレハーノフの間に以後密接な接触が継続発展したならば，あるいは彼の中のナロードニキ主義からの遺産は音をたててくずれたかも知れない．しかしツアーリの圧迫により彼はジュネーヴに氷ずけにされた．ロシヤの運動との接触はかぞえるほどしかなくかつ一時的であった．わずかに西欧社会民主主義の影響のもとにプレハーノフの思想は永い苦しい解体過程をとらねばならなかった．

レーニンはすでに1894年，卒直に次のようにのべている，「ロシヤの労働者は，いっさいの民主主義的分子の先頭に立ち上がって絶対主義をうちたおし，ロシヤのプロレタリアートを公然たる政治闘争のまっすぐな道にそい，勝利的な共産主義革命へみちびくであろう」.(55) また97年には「労働者階級だけが絶対主義の最後まで一貫した無条件の敵であり，労働者階級と絶対主義のあいだにだけは妥協はありえない」.(56) とのべている．ここにプロレタリアートこそが絶対主義と闘うという思想は明快に確立している．「革命的インテリゲンツィア」は「労働者階級の思想的代表者」として労働者と合体せしめられている．絶対主義と闘かう労働者党の思想もまた明快に確立しているのは，97年のラヴローフ批判によって明らかである.(57) レーニンはペテルブルグの「闘争同盟」を例にあげ，「このような組織は，わが国の諸条件に適合した労働党の組織であると同時に，絶対主義に反対する強力な革命党でもあるだろう」,(58) とのべている．かようにレーニンは，プレハーノフが難行しなければならなかった点を94年前後に克服している．ナロードニキ主義の破産と「自由主義社会」の正体の暴露，プレハーノフの先駆的業績の存在，90年代の労働運動との接触，などの条件がその思想の奥に考えられる．それに対してジュネーヴにおけるプレハーノフは，絶対主義と闘うプロレタリアートの力に最後的な確信をうち立てることが出来ず，それと関連して「革命的インテリゲンツィア」への連帯性を西欧社会民主主義者への連帯性の中に横すべりさせて残存させ,(59) このことがプレハーノフを，一方で革命が近づくとともに起って来たプロレタリア大衆の昂揚に信頼をおきその立場に立つことを妨げ，80年代に入るとともにはっきりと自由主義社会の政治的代表者と化して行った以前の「革命的インテリゲンツィア」に期待をつながせて，結果的に自由主義者と協同させる原因となったと考えられる．このように，往年のナロードニキ主義との訣別の不充分さが，のちの彼のメンシェヴイキ的方針の出現を媒介した面は大きいのではないだろうか．ここでは，ナロードニキ主義の残りとの関連したプロレタリアートのヘゲモニーの思想の未成熟から，自由主義ブルジョアジーのヘ

(55) Ленин, Соч. изд. 4, том 1, стр. 282.

(56) его же, Соч. изд. 4, том 2, стр. 311.

(57) ラヴローフは述べる「ここでかんじんなことは1つ，ただ1つのことだけである．すなわち，絶対主義に反対する革命党の組織をほかにしても，絶対主義のもとで強力な労働者党を組織することが可能であるか，ということである」．これに対してレーニンは，「ペ・エル・ラヴローフにとっては非常に重大なこの差異が，われわれには全く理解できない．これはどういうことか？『絶対主義に反対する革命党をほかにしての労働者党』だと？ いったい労働者党そのもの革命党ではないのか？ 労働者党は絶対主義に反対してはいないのか？」とした．Ленин, Соч. изд. 4, том 2, стр. 315.

(58) Ленин, Соч. изд. 4, том 2, стр. 317.

(59) 第2インターパリ大会の演説でプレーハノフは「革命的インテリゲンッア」に対して呼びかけている．またすでに分折したごとき1902年綱領草案の構成を見よ．

ゲモニーの承認が出てきた，といえよう．

Ⅲ 政治闘争論

前節で分析したブルジョア革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーに関するプレハーノフの思想の弱点は，当然にもプレハーノフの階級闘争論の弱点へとつながってゆく．83年の政治闘争論の分析をつうじて明らかにしよう．プレハーノフは次のようにのべている．「歴史はわれわれに次のことを示している．すなわち，経済的発展の過程が社会の階級対立を呼び起したところでは，いつもいたるところで，これらの諸階級の利害関係の矛盾が不可避的に彼らを政治的支配のための闘争に導いた．この闘争は単に支配階級の種々なる層の間に生じたのみならず，またこれらの諸階級を一まとめにしたものと民衆の間にも生じたのである．いつもいたるところで，政治権力というものは，支配に到達した階級が自己の幸福および今後の発展のために必要な社会革命を行なう際に，それを助ける槓桿であった」．(60)「社会の生産力の発展のための自由な道をひらくためには，この発展を阻止する所有関係を除去しなければならない．すなわちマルクスがいうように社会革命を行なわなければならない．しかし，法権力が旧秩序の代表者の手にある間は，換言すればそれが支配階級の利害関係を防衛している間は，このことは不可能である．それゆえ，新人すなわち一つのまたはいくつかの被圧迫階級の代表者がこの恐ろしき武器を自己の反対者から奪取してその敵につきつけようと希求しているのは驚くにたりないことである．これら諸階級が，たとえその目的とするところが経済的変革にあるにしても，政治闘争および国家権力の獲得の道に衝き出されるのは理の当然である」．(61) ここに政治闘争は階級闘争と結合され，革命と結合されている．レーニンがこれを「ロシヤ社会主義の最初のプロフエシオン・ドウ・フオア」(62)と名づけて以後，ここにプレハーノフにおける革命的マルクス主義の時代の起点があると考えられている．(63)

しかしこの場合次の点に注意が向けられなくてはならない．すなわちプレハーノフは政治権力が社会革命を行うさいにそれを助ける槓桿であること，法権力は恐しき武器であることをのべる．だが政治権力の内容は何か，法権力が恐しき武器でありうるとき，その力は何によるのか，これらに答を与えていないのである．政治闘争と階級闘争との関連は次のごとく考えられている．すなわち，国家・政治権力は，支配階級のための「要塞」，いわば一種の道具であり，その道具がいずれかの階級によって使われるとそれは一方の階級のためになり，他方の階級のためにはならぬという結果になる．ここに国家の階級性がある．こうした意味で階級性のある国家の奪いあい，政治権力の奪いあい

(60) Плеханов, там же, стр. 76.
(61) там же, стр. 81.
(62) Ленин, Соч. изд. 4, том 4, стр 264.
(63) И. Б. Миндлин, Переход Г. В. Плеханова от народничества к марксизму. Вопросы Истории, 1956. No. 12.

中村義和 19世紀後半におけるロシヤ農民共同体とゲ・ヴェ・プレハーノフ 政経論叢 第7巻 第1,2号
中村義和 19世紀ロシヤの思想的伝統とプレハーノフのイデオロギー的転回 政経論叢 第7巻第3号 第8巻第1号

であるがゆえに政治闘争は階級闘争である．これは，階級がそこに組織されているという点に政治の意味をみ，政治権力の発揮する力の根源もまたそこにある，とみるマルクス主義(64)には少くとも一歩の差があるのである．「プロレタリアートは，自己の政治的綱領を現代の国家機構の獲得だけに止めることはしない．唯一の政治的形態として直接的人民的立法を要求する」，(65)といったときも，無政府主義に近い将来社会像があるいは国家の形式が問題とされているとしてよかろう．さてこうしたプレハーノフの思想は第2インターの理論家のそれと符合するものでもあるが，ここではロシヤ革命思想史の脈絡のなかで考えてみよう．

プレハーノフが革命運動に参加しはじめた70年代にあっては，ナロードニキ主義は圧倒的にバクーニン主義の影響のもとにあった．伝統的な西欧型ブルジョア民主主義に対する不信は，バクーニン主義において極めて徹底したドグマの形をとっていた．政治的自由やブルジョア的権利は「政治革命」の問題であり，経済制度は「社会革命」の問題であるとされた．「社会革命」は一揆や騒動を含むものであり，しかも「政治革命」と「社会革命」，「政治」と「社会」，「国家」と「社会」とは機械的に対置された．そして「政治革命」は不毛なものとされた．(66)このような思想は一般に革命運動の組織化という任務に耐えうるものでなく，政治的自由を軽視することによって，ブルジョア民主主義革命をさしせまった任務としていたロシヤの革命運動の戦略に混乱を持ち込むものであった．ヴ・ナロードの運動が失敗に終り，警察の執拗な追求に対する報復として政治的テロルが開始されたとき，この理論を克服すべき機会は訪ずれる．革命思想は，実践の中から不可避的にあらわれた政治闘争を如何に基礎づけるか，という点を中心にして入りみだれた．(67)79年政治闘争反対の側に立ったプレハーノフは，以後4年の理論的研讃を経て，「いわゆるテロリストの運動は，わが革命党の発展に新しい時代を――政府との自覚的な政治闘争の時代を拓いた．わが革命党の事業におけるこの変化は，彼らが前時代から受けついだすべての見解の修正を必然ならしめる」，(68)とし，マルクス主義こそが政治に真の規定を与えるものだと宣言したのである．

この場合プレハーノフは，ナロードニキ批判のためにいくつかの特徴的な視点をおいている．第1は「土地と自由」ではなくて「法治国」だ，とする視点である．81年「人

(64) マルクスは「宣言」の中で，「本来の意味での政治権力は，他の階級を抑圧するための一階級の組織された暴力である」とし，プロレタリヤ権力について，「国家すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」とかいた．レーニンは99年に，「全国にわたる全労働者階級のすべての先進的代表者が，単一の労働者階級であることを自覚し，個々の雇主に対してでなく資本家階級全体にたいし，またこの階級を支持する政府に対して闘争を開始するときはじめて，労働者の闘争は階級闘争になる．……資本家に対する労働者の闘争は，それが階級闘争となるに応じて必然的に政治闘争となる」といっている．Ленин, Соч. изд. 4, том 4, стр. 195-196.

(65) Плеханов, там же, стр. 79-80.

(66) 中村義和 19世紀ロシヤの思想的伝統とプレハーノフのイデオロギー的転回 政経論叢 第7巻第3号 p. 51

(67) 鳥山成人，「"人民の意志党" の革命理論」スラヴ研究 第2号
B. A. Тварбовская, Кризис «Земли и волн» в конце 70-х гобов, История СССР, 1959, No. 4

(68) Плеханов, там же, стр, 52.

民の意志」誌は，「大小を問わず農民層の間に叛乱をよび起した動機に注意をはらってほしい．それらの動機は常に政治的または法律的性質のものであって，上から，国家または行政機関の領域から出て来た．……勿論ほとんどあらゆる人民の動乱の基本条件たりしものは物質的苦難であるが，常に動機の役割を果したのは，当局の側からの法律違反か，その利益において人民に近い何らかの組織された核の内から出てくる蜂起の発端かであった」.(69)「黒土再分割」派は「土地と自由」のスローガンを擁護し，政治的自由に対する伝統的な観点を守ったが，83年，プレハーノフは「人民の意志」派の成果をみとめつつ次のようにのべた．「彼ら（農民―筆者）が蜂起したのは土地分割のためではなく，官憲の圧迫，税制の力不相応な重荷，アジア的な滞納金徴集方法などに対してであった．能動的抗議の大部分の場合を普遍化した公式は『法治国』であって，当時われわれ全部（分裂以前の土地と自由派―筆者）にそう思われたような『土地と自由』ではなかった」.(70)このように「土地と自由」ではなくて「法治国」とする見方はプレハーノフにおける土地革命の過少評価とつながって行ったことはもちろんである．ここでは当面，プレハーノフが絶対主義国家を官僚主義，無制限の権力といった支配形態において問題としているが，本質の問題にまではつき進んでいないことが指摘される．つまり政治と経済を階級概念をつらぬくことにより統一する観点が，充分徹底していないのである．

第2は革命を長期の闘争を経てはじめて獲得されるものとした視点である．プレハーノフはバクーニン主義派＝暴動派の一員として出発する．当時一方にはラヴロフ主義者があり，前者が主として農民一揆の煽動を意図していたのに対して平和的宣伝を主としていたことは周知のとおりである．前者はより短期的な決戦の方針をもっていたと考えられる．「人民の意志」派は，農民一揆の後続を期待して1881年を頂点とするテロル闘争を行なったが，プレハーノフはその中に暴動派の必然的展開をみた.(71)そして「人民の意志」派に対するプレハーノフの批判は，一面暴動派一般に対する自己批判であり，時期尚早な一揆に反対して長期の宣伝活動を主張することであった．それはプレハーノフが逆にラブロフ主義に近づいた(72)ことによってもうかがわれる．このことはプレハーノフにおいて一揆の思想がその後発展しなかったことと関係する．バクーニン主義のドグマの批判が単なる政治的自由の意義の承認ではなくて，一般に政治闘争の承認であったとすれば，無政府主義的なオーブシチナの理想は，プロレタリアート独裁のイメージにおきかえられてゆかねばならない．一揆の思想は，単なる宣伝普及活動とはちがって大衆の具体的行動を予定し，その中であらわれる権力を予想するものである．「人民の意志」派の実践は，「臨時革命政府」の思想，あるいは制憲議会選挙時における出版言論集会綱領の完全自由の思想など，きわめて重要な萌芽を生み出していた．しかしプレハーノフの暴動派批判は，長期の平和的宣伝というラブロフ主義に近づくことによって，これらの思想をプロレタリヤ独裁の思想の中に吸収してゆく道をとざした．

(69) 鳥山成人，同前，p. 43
(70) Плеханов, там же, стр. 65.
(71) там же, стр. 65.
(72) там же, стр. 58. и стр. 68.

第3は，「ロシヤの独自性」の思想を批判し，ロシヤもまた西欧が進んだ道を歩むであろうとなす視点である．ナロードニキの思想は，ロシヤにおいてはオーブシチナが守られており，それがそのまま社会主義の基礎となることによって西欧のようなブルジョア民主主義とブルジョアジーの支配の時代を通らないで発展することを得る，との内容をもっていた．そして「ロシヤの独自性」という考えはその後ナロードニキの古典的形態が崩壊しはじめるころにも，それぞれの形でナロードニキ主義を支える柱になっていたと考えられる．「人民の意志」派において「ロシヤの独自性の理論はもうヘルクレスの柱にまでも達した」.(73)プレハーノフが政治的自由のスローガンを認めて行く過程は，ロシヤにおけるオーブシチナの分解の確認とかかわりあいながら進んでいる．1880年9月プレハーノフは，ロシヤの次の段階を，「多分」ブルジョア憲政制度であろうとし，1881年1月には「たしかに」としたが，その過程でたえず「独自性」なるものが問題とされた.(74)1885年の「われらの対立」の中でも，「独自性」を批判することによって「未来はロシヤに何を約束するか．われわれは何よりもブルジョアジーの勝利と労働者階級の政治的経済的解放のはじまりであると思われる」.(75)と見透しをのべている．ロシヤの「独自性」の思想がナロードニキ主義にとって強固な柱であればあっただけ，プレハーノフにおけるこの「独自性」の否認というテーゼは，単に政治的自由のスローガンの確認と並行したばかりでなく，そのスローガンをかなりの程度に媒介したものと考えることができる．つまりオーブシチナの分解ということはロシヤが西欧と**同じ**だということであり，**したがって**ブルジョアジーの一時的な勝利とその法的補足物たる法治制度が出現するであろう，とつづく思想である．「自然的法的補足物」という考え方は，1902年の綱領草案にもあらわれている.(76)プレハーノフにおけるこういった考え方は，彼にきわめて早い時期にかなりたしかな見透しを得させる原因となったと同時に，一方かれの理論を底のあさいものにとどまらせる枷にもなったと考えられる．すなわち，ロシヤ史は西欧と同じような発展段階を経るであろうという見透しは，かえってときにはロシヤ史の内的発展の必然性の追求を弱める結果をもたらしたであろうからである．

第4に政治的自由の意義についての視点が分析されなくてはならない．すでにのべたように，政治的自由の問題は，政治的テロルの問題をきっかけにして革命思想の中の問題となった．しかもそれは，「われわれ（革命家—筆者）の活動を許さず，われわれ陣営から最も良い活動家を日々奪いとっており，われわれの力の99％がそれとの無益な闘争に使われている，スパイ・密告・つまらない難くせの網でわれわれをしばり上げているこのしつこい障害」(77)に対する報復としてのテロルであった．ツアー制度の政治的

(73) Плеханов, там же, стр. 68.
(74) Summel. H. Baron, Plekhanow and the Origins of Russian Marxism, the Russian Review Vol 13. No. 1 154 p. 46
(75) Плеханов; там же, стр. 290-291.
(76) Ленин: Соч. изд. 4, том. 6, стр. 9.
(77) 鳥山成人，同前，p. 30
B. A. Тварбовская は前掲論文で «土地と自由» 派内で政治闘争が認められだした初期にはその概念が広いことを指摘しているが，しかし H. A. Морозов らが論陣をはるころには狭められており，プレハーノフが主として対手としたのは一時 «土地と自由» 誌編集部で一緒に活動した Морозов であったと考えられる．

本質はバクーニン主義のドグマがあるために正面から意識されていない．それはまず，ツアーの圧迫が革命家の自由を奪っているという限りで認識される．政治的自由はまず革命家のための自由である．バクーニン主義のドグマは一部分くずれ出すが全面的崩壊にはまだまだである．政治的自由の意義が拡大して行って，まさに全人民をくるしめていた無権利状態を廃止させるものとして，全人民の自由の問題に据えなおされたとき全面的崩壊がくるであろう．プレハーノフにおいては，政治的自由の意義は革命家の自由の問題から労働者階級の先進的代表者の自由の問題にまでは確実にひろがっている．しかしさらに全人民の問題にまでひろがっているとはいえない．85年，87年の綱領草案は，客観的には，当面の政治経済要求の中に，それを妨げているツアー制度の性格づけを行っているとはいえ，正面切った規定はない．1902年の綱領討議においてレーニンは，プレハーノフの案を「農奴制の残存物の影響については，それらが苦しい重圧となって勤労者大衆のうえにのしかかっている，というだけでは不充分である．国の生産力の発展をはばんでいることも，農奴制のその他の社会的諸結果をも指摘する必要がある」[78]とくり返し批判した．

かくてわれわれは83年前後のプレハーノフの政治闘争論を若干分析した結果，そこでは政治が階級に関連させられはじめてはいるが，いまだ階級のもつ力が理論の中に汲みつくされていないこと，それが彼のナロードニキ主義批判の型によって条件づけられていることをみるのである．

Ⅳ　綱領概念の問題

すでにみたように，プレハーノフは自己の起草した綱領的諸文献の中で，政治的自由という闘争目標を示しつつ，それをかちとるべき力を明快に指摘しなかった．またそれは，一般に階級闘争としての政治闘争の定式化に今一歩という問題点をのこしていることと関連していた．では彼は階級的前衛党の綱領の概念を持っていたのかいなかったのか，あるいはどこまでそれに近づいていたのか．84年プレハーノフは党を「それによって人々が自己の努力を結合することの出来る」[79]ところの組織であると規定している．綱領は当然にもその場合に人々の努力の結合点を示すものである．プレハーノフにとってこの点の認識がはっきりしていたことはうたがいを入れない．「土地と自由」派以来のナロードニキもまた，その壮大な組織的闘争をみても綱領作成に対するなみなみならない情熱をみても，綱領についてそのような認識に達していたであろうことはうたがいを入れない．問題はプレハーノフがそれ以上のものを示すか否かである．

第1に，83年のプレハーノフが出している「革命的理論」と「政治的見透し」の概念の分析を試みることにする．プレハーノフは「革命的理論なくして真のいみの革命的実践はないのではないか」．[80]といったが，シードロフ，フオーミナら最近のソヴィエト研究家のやっているように，レーニンの「革命的理論なくして革命的実践なし」[81]という

(78) Ленин, Соч. изд. 4 том 6, стр. 39.
(79) Плеханов, там же, стр. 367.
(80) там. же, стр. 95.
(81) Ленин. Соч. изд. 4, том 5, стр. 341.

テーゼと等置できるものなのであろうか.「革命的理論」とプレハーノフがいう場合その内容は限定されている.それは「19世紀における最大かつ最も革命的な理論」,(82)「現代社会主義」すなわちマルクス主義のことである.なぜ「革命的」であるか.「その時代における最も先駆的な思想」(83)なるがゆえである.「運動が時代後れのまた誤れる理論から発生するであろう間は,それはただその若干の面で革命的であるにすぎず,そのあらゆる方面においてそうなのではない」.(84)マルクス主義は「単に社会主義の反対者の科学的成立不可能性を完全な明瞭さを以って示したのみならず,また誤謬を指摘して同時にそれらに歴史的説明を与える」(85)ものであり,したがって,ロシヤのナロードニキがマルクス主義者になるとき,「わが革命運動は何物をも失なわないであろうばかりでなく…… 新しき見地がロシヤに存在する諸フラクションを和解させるであろう」.(86)なぜなら諸フラクションはそれぞれ「一面的」であるが,またそれぞれに正しくもあるからである.かようにして一面的な諸綱領を止揚統一し,それぞれのフランクションを統一することにより,「先駆的・全面的」な思想は「革命的」役割をはたしうるということになる.次に「政治的見透し」という概念に関連して,プレハーノフは次のようにのべている.「政治的見透しの欠如は,運動の最初からしてロシヤの革命家に自分の最も手近かな任務を自分の力に照応せしめることの障害になったもので,これを条件づけるものは,ロシヤの社会的活動家に政治的経験が不足していたことに外ならぬ」.(87)「われわれは常に自分の力を誇張していた.われわれを待ち設けているところの社会的環境の反抗を,その全てにわたって勘定に入れることを決してしなかった.そして事情によって一時的に好遇された行動方法をば,その他のすべての方法および態度を排除する普遍的原理に高めることを急いだ.……ほとんど2年毎にわれわれはこれらの綱領を変え,何らか堅固なものの上に定着することができなかった」.(88)ここで見透しとは,革命までの距離・所要時間の問題である.オープシチナを基礎とした無政府主義的農村社会主義の綱領は,当然農民の中にその準備がすでに出来ているとの思想とつながる.その「見透し」が革命家に一揆的戦術を呼びおこす,プレハーノフは,革命が長期の事業であることを強調してナロードニキを批判したのであった.ところでここで注目しなくてはならないのは,プレハーノフが「政治的見透し」の確立から,綱領の不断の変更を克服すること,および政党の現実の力を手近かな目的と一致させることを導き出していることである.たしかに革命近しの理論は,それ自体として一つのドグマ化していたことは事実であろう.しかしそのドグマは何らかの綱領の基礎のうえに成立したものであり,不断の方針変更の底にこそ綱領があるべきであろう.ここでは綱領から「政治的見透し」が出されるのではなく,その逆になっている.さらに「政党の最も手近かな目的とそれの現実のあるいは可能な力と一致せしめる」という戦術的配慮が,ここでは綱領と並行した

(82) Плеханов; там же, стр. 95.
(83) там же, стр. 95.
(84) там же, стр. 95.
(85) там же, стр. 69.
(86) там же, стр. 95.
(87) там же, стр, 96.
(88) там же, стр. 96.

場所におかれていることも注目される．ここで「現実のあるいは可能な力」とプレハーノフがいう場合，彼が主として念頭においているのは「党←革命的インテリゲンッィア」の力である．これは諸フラクションの統合自体を力とみる考え方と一貫するものであり，綱領をさしあたり革命家の努力の結集点とみる綱領観の範囲を出るものではない．1902年のレーニンはやはり「革命的理論」(89)とも「先進的理論」(90)ともいっている．しかしそれがプレハーノフとはちがって，とりわけ「階級闘争の理論」のいみである(91)ことが注目される．「革命的理論」はそのいみで，「現代社会のすべての階級の相互関係」(92)を基礎にした綱領の概念に結びつき，したがって綱領の呼びかけが「革命的階級の精力によってうけこたえられる」(93)確信とつながっている．かくしてレーニンにあっては，革命党の綱領の概念から階級党の綱領の概念への移行は完了している．綱領はかちとるべき目標を示すばかりでなく，そのための力をも示すものである．なぜならば力は綱領の中に，諸階級の分析の中に，階級という可能的な力として含まれているからである．プレハーノフにはこのような階級党の綱領概念はない．このことは政治的自由を綱領的目標としてかかげつつ，しかもそのための力についてはっきりした考え方を持てなかったプレハーノフの思想の問題点と符合している．

第2にプレハーノフによるチエルヌイシエフスキーの道徳論批判を分析する．チエルヌイシエフスキーの道徳論は18世紀フランスの唯物論と内容において共通するもので，道徳を共通利益に基礎づけている．この「共通利益」の考え方は，革命的階級党の綱領の概念と緊密に関係するものである．(94)チエルヌイシエフスキーは次のようにのべた．「人間は自分に楽しいように行動する．より大きい利益，より大きい快楽をうけるために，より少ない利益，より少ない快楽を拒否するように命ずる打算に導びかれる」．(95)「全人類的利益は個々の国民の利益よりも上にあり，全国民の一般的利益は個々の階層の利益よりも上にあり，多数の階層の利益は少数の階層の利益より上にある」．(96)「個々の国民が自分の利益のために，社会の利益あるいは個々の階層の利益あるいは全国民の利益を踏みにじった時は，その利益を害された側だけでなく，その侵害でもうけてやろうと思った側さえも，結果において損害をうけるのがつねである」．(97)チエルヌイシエフスキーはここで個々の利益を共通利益へと結集し，それを善とすることによって革命勢力の起ち上がりを期待したのである．プレハーノフはこれに対し，「打算と習慣は同一視できない」，「理智性」を極端に高くみている，と批判する．(98)そして「全体の利己主義は決して個人の利他主義を排除するものではない．反対にそれは全体的利己主義の源泉であ

(89) Ленин, Соч. изд. 4, том 5, стр. 314.
(90) там же, стр. 315.
(91) там же, стр. 326.
(92) там же, стр. 383.
(93) там же, стр. 416.
(94) ガロデー，「近代フランス社会思想史」，平田清明訳，1958，p. 47-48.
金子幸彦，「バザーロフについて」，スラヴ研究　第2号，1958，p. 27.
(95) チエルヌイシエフスキー，「哲学の人間学的原理」松田道雄訳，1955，p. 107.
(96) 同前　p. 109.
(97) 同前　p. 109.
(98) Плеханов, там же, том 4, стр. 257.

る」.[99]「一定の個人の行為がこの社会を満足せしめること大であればあるほど，この個人はそれだけ克己的であり道徳的であり利他的であるだろう」.[100]として，社会的利己と個人的利己を完全に切りはなしてしまう．社会全体は一つの自律的統一体としてあらわれて，個人をはじき出している．チエルヌイシエフスキーは個人のあつまりとしての全体を考え，個人的利己を純化させて行くことで社会的利己が出てくることを強調したと考えられるが，プレハーノフはそれを受けついでいない．では個人が個人的利他であるにもかかわらず共通利益を守る行為をするのはなぜか，プレハノーフは「道徳的精神における人間の教育は，社会にとって有益な行為が彼にとって本能的要求となることである」,[101]「社会的感情は世代から世代へと受けつがれ，自然陶汰によって強化される」[102]とのべる．すなわち習慣である．共通利益に反した行動をした部分の運命についてのチエルヌイシエフスキーの言及を，プレハーノフは，「共通利益よりも部分的利益を好む人間・階級・あるいは民族は，結局彼ら自身この『理論的虚偽』のために苦しむのである，とチエルヌイシエフスキーは信じている」,[103]と批判する．レーニンは，「強いのは一定の階級の意識された利害に立脚する戦士だけである」といったが，プレハーノフにはその観点がない．チエルヌイシエフスキーの道徳論は，道徳を利益と結びつけ，多数の利益ということで自己に正当性をかちとり，さらに全体すなわち階級利益を守ることによって個人的利益は真に守りうることを主張することにより，個々の人民を強力な反権力の軍隊に結集せんとするものであって，単なる道徳論ではない．エルヴィシウスが，「道徳学はもしひとがそれを政治学や法律学と一致させなければ無価値な科学にすぎない」といったとき，それは道徳学が革命によってかちとらるべき民主主義制度の要求と結びつくことによって，それ自体政治学になることを意味するものであったろう．共通利益を階級利益と，個人を階級の一員と，共通利益の統一的表現を階級的前衛党の綱領とおきかえてゆくことが，この道徳学を直線的に継承することになったはずである．しかしプレハーノフはそれをしていない．このことには次のような時代的背景がうかがわれる．すなわち，「革命家」の集結はすすみ，やがて「人民の中へ」入りはじめるが，人民は，つまり「社会」は「革命家」の集団と別に存在する．さしあたり「革命家」たちは，犠牲的に「社会」のために働かざるを得ないのである．独自的労働運動のはじまりとともにあらわれた労働者側の思想が，このことに関して「革命家」たちの思想とは対称的に，「１人は万人のために，万人は１人のために」（南露労働者同盟が各メンバーと同盟との間の相互義務をこのように規定した）であったことは暗示的である．もちろんこれはそのままでは階級党の綱領概念には遠い．しかし個人が全体の中で守られるという理想は当初より労働者の中にあったのであり，革命家の理論がそれを吸い上げたときこそ，前衛党の綱領概念が成立するというべきであろう．

最後に歴史と個人をめぐってのプレハーノフの言及を瞥見しよう．革命家と民衆との

(99) там же, стр. 259.
(100) там же, стр. 259.
(101) там же, стр. 259.
(102) プレハーノフ，「フオイエルバッハ論への評註」川内唯彦訳，1930，ナウカ，p. 240.
(103) Плеханов, там же, стр. 258.

関係如何というロシヤ革命思想史を通ずる設問の一環として，当時マルクス主義は「歴史の必然性と個人の意義」の関係について説明を与えないと批判されていた．94年にレーニンはミハイロフスキーへの反批判として「全歴史は疑いもなく行為者であるところの諸個人の活動から成りたっている．個人の社会的活動を評価するさいに生ずる現実的問題は，どのような条件のもとでこの活動に成功が保障されるか……である．……この問題の解決はロシヤにおける社会勢力の配置やロシヤの現実を形成している階級闘争やに関する考え方に，じかに直接に依存している」,(104) とのべた．ここではまさに綱領の問題が提出されている．プレハーノフはどうか．彼は98年の論文において，個人が歴史の中で意義をもつことを一般的にのべたのち，「有力な個人は彼の知力と性格の特徴によって，諸事件の個性様相と諸事件の特殊な結果のいくつかを変化させることが出来る」,(105)「しかし彼らはその一般的方向を変えることは出来ない」,(106)「偉大な人間は，彼の個人的な特徴が偉大な歴史的諸事件に個性的特徴をあたえるから偉大なのではない．彼が偉大なのは，彼が彼の時代の偉大なもろもろの社会的要求に役立つ上で，彼をもっとも有能にするような諸特徴をもっているからである」,(107) とする．シードロフはプレハーノフのこの思想を，「すぐれた歴史的個人は，ある社会勢力ある階級の利益を表現し，そしてその階級は彼らを支える」，という思想であると評価している．(108) しかし当時の検閲その他の条件を考慮したとしてもあきらかに読みとりすぎである．プレハーノフは「社会的要求」，「経済的必然」なる語をそれ以上追求しておらず，他の文献から類推しても，その中に個々の大衆が必然的にそうしないではいられない行動を含意しているとは思われないからである．必然性の概念が抽象化し，その中から大衆の生活がうすれて行くにつれて，歴史に対する大衆の役割はうすれてゆく．まさにそれゆえプレハーノフは，「広大な活動舞台が開かれているのは『創始者』に向ってばかりでなく『偉大な』人々に向かってばかりでもない．……偉大という観念は相対的な観念である．道徳的ないみでは聖書の言い方によれば，『その友のために己の命を捨つる』者はだれでも偉大なのである」,(109)といわなくてはならなかったのである．「偉大な」ということの相対性を強調することにより，一般大衆が歴史に参加する可能性は切りひらかれた．しかし同時に，偉大なる個人が綱領をもった前衛に発展する道もとざされた．かようにして，綱領を媒介にしての前衛と階級との呼応関係の思想が，プレハーノフにおいていちじるしく希薄である，というのが事実であろう．

V　結　　語

以上の分析によってわれわれは，プレハーノフの思想が，83年のナロードニキとの分裂を支えるには充分なものであったとしても，94年以後の大衆自身の運動を自己のなかに

(104) Ленин, Соч. том 1, стр. 142-143.
(105) Плеханов, там же, том. 2, стр. 326.
(106) там же, стр. 326.
(107) там же, стр. 333.
(108) М. И. Силров, там же, стр. 14.
(109) Плеханов, там же, стр. 334.

包摂しうる性質のものではなかったことを明らかに知るのである．プレハーノフの思想が，その内容からいって1884—1894年のロシヤ社会民主主義の「胎児的発展」の時代とぴったりと照応するものであることも知られる．(110) 個々の分野で94年以後もプレハーノフの思想は積極的な役割をはたすとはいえ，労働者自身の時代がはじまり，プレハーノフの弱点をのりこえたレーニンがその先頭に立つやいなや，プレハーノフはおくれはじめるのである．ここから次のような展開の見透しが生れうる．すなわちプレハーノフは庶民革命家の時代の制約を理論的に克明することができず，その弱点はジュネーヴへの亡命という条件のなかで最後までのこる．後年のメンシェヴィキー的偏向は，その点の展開として理解出来ないか．「党の胎児的発達」の時代は，大衆運動との結合がないなかでしかも綱領の要点が守られた時代である．プレハーノフはその時代的特徴を体現している．第2インターナショナルの中でのプレハーノフの独自性は，ブルジョアシーの支配のやや安定していた西欧に対する，まさにブルジョア革命直前の昂揚にあったロシヤの独自性であり，メンシェヴィキーの中でのプレハーノフの独自性は，94年以後政治の中に入ったメンシェヴィキーに対する83—94年の革命家の独自性である，と理解出来ないか．しかしこの点の展開は別稿でなさるべきである．

（110） 同じように農民の役割を評価したかったとしても，94年以前的なプレハーノフと，1905年の昂揚の中から出て来たトロッキーとはプロレタリヤのヘゲモニーの思想について全く異なったところに立つている．

Plekhanow's Idea of the Hegemony of Proletariat

S. ARAMATA

Plekhanow for the first time in Russia separated social-democracy from the other revolutional currents of thoughts. The essential points of its Program manifested by him were, (1) Russia had already entered the way of capitalitic development, (2) therefore Russian socialism was expected to be won by labour class, (3) but in Russia at first political liberty must be established. Zinoview said that Plekhanow was, side by side with Lenin, a father of the idea of the hegemony of proletariat. After publication of the text-book on the history of the communist party of Soviet Russia superintended by Stalin, Plekhanow was treated as the theorist who had no idea of the hegemony of proletariat because of his agreement to the hegemony of liberal bourgeois. In this Article, examining the relation of (3) with (2) in essays published mainly in 1880 's, the author shows the underdeveloped character of Plekhanow's idea of the hegemony of the proletariat in general itself, and illustrated its interdependence with the remnant of "Narodnichestvo". Lenin's concept of "the embryo process of the party" (1883-1894) can be expanded into the realm of the history of political thoughts, and it will be useful to decide Plekhanow's place among Russian revolulionarists.